

KONAN UNIVERSITY

ベーオウルフ : 韻文訳一-六六一行まで

著者	栞矢 好弘
雑誌名	言語と文化
巻	3
ページ	1a-26a
発行年	1999
URL	http://doi.org/10.14990/00000327

ベーオウルフ（韻文訳一——六六一行まで）

柘 矢 好 弘

序

見事な現代語訳を公にしたマイケル・アレグザンダー (Alexander, 1973) は、その序文において「アングロ・サクソン学者でない多くの人々が、難しく不慣れなことばであるにもかかわらず、この詩の翻訳を試みているが、それは、なによりも、この詩がもつ持続する詩のエネルギー、発話としての雄渾さに引かれたものである。そこに魅力を感じた点では、私も同様である。」(九ページ)と述べている。訳者も例外ではない。

訳者は、古期英語の研究を専門にする者ではないが、故デイヴィッド・アバクロンビー教授の教えを受けて、韻文に対する音声学の関心を抱くようになり、『ベーオウルフ』がもつ雄勁な響きに引かれ、この翻訳を思い立った。原詩は、おそらく、アレグザンダーの序文の締め括りにあるように、「ハーブに合うように作られ、ハーブに合わせて朗吟、いや、歌われた」ものである。それは、おそらく、行中にポーズを置いたかどうかという問題を別にすれば、J・B・ベシンガー氏 (Bessinger, Jr., 1996²) の朗読のようなものであったと思われる。最初は即興の朗吟だったのでないだろうか。文の配列が時間の経過通りで

ないところがあつたり（訳詩では、そのままでも意味のとれるところは、敢えてそのままにした）、細かな事柄の食い違いがあつたり、詩の全体とは無関係な詩行があつたりするのも、即興の朗吟なら不思議ではない。

原詩は、しばしば同じことを頭韻を踏むためにことばを変えて繰り返し返す。この種の表現の反復もできる限り正確に訳すようにした。これも頭韻のためであるが、しばしば、部族名をあらわす固有名詞の頭に、それを修飾する語がつけられる。時には、同一の部族名に、「東」、「西」などの語がつけられる。「東…」も「西…」も同じものを指している。この日本語訳においては、固有名詞の、東西南北を表す修飾語は、意味上の誤解を避けるため省略した。

一説には八世紀のものとも言われるこの詩の、表現法のうち、現代人に異質と思われるものは、できるだけ残すようにした。当時の人々のものの見方を知るといふ側面があることを考慮してのことである。

原詩のリズムを訳詩の上に再現することは不可能ではあるが、リズムの上で違和感が生じることだけは避けるように務め、韻文としてのリズムの維持に腐心した。しかし、すべての行でうまくいったわけではない。将来の課題としておきたい。しばしば古語法に頼ったのは、リズムを維

持するためにほかならない。また、行が一般に短くなったが、これも韻文としてのリズムを維持するためである。原詩の半行単位ということと無関係ではないかも知れない。これも将来の課題である。

高名な精神医学者であり、現代ギリシャ詩やポール・ヴァレリーなどの翻訳で大きな業績を残された、畏友中井久夫博士の示唆によって、行の区切りは、日本語として意味の取りやすいように、また、リズムの維持を考えて行った。したがって、原詩の区切りとは必ずしも一致しない。訳詩に示した原詩の行番号は、あくまでも目安でしかない。

本来注にすべきものを読む人の便宜を考慮して詩行の中にとり入れたところもある。これも、中井博士の示唆による。

妻和子と桂一・令明の二人の息子が、拙稿を読んでコメントをくれた。特に次男令明は、音感にいたるまで詳細な批評をしてくれた。指摘された部分を修正したことは言うまでもない。この家族の好意に心から感謝する。

なお、「参考文献」の執筆には、桂一が作成した Booksort, ver. 2.053 を用いた。

序 節

いざ

槍に優れたデネの民⁽¹⁾

その邦人に君臨なした王者たち

この貴人らの過ぎし日の

誉れわれらの耳に伝わる

シュルド・シェーヴィング

そもそもは身寄りなき身で見出され

以来この方いく度となく

敵の軍勢 あまたの部族

かれらの手より

蜜酒を酌む宴の場をば奪い取り

凶猛の民エルリ族⁽³⁾とて恐れおののく

寄る辺なき日の心の深傷⁽⁴⁾

癒すのはシュルドが後の名の誉れ

天の下その名轟き栄光にその身輝く

四辺の民ことごとくシュルドに靡き

鯨わたる海原を越え

朝貢におよぶにいたる

まこと秀でた王だった

王に後の日御子が生まれる

館のうちに若き王子が

統べる者なく国民が

なめた辛苦の長い歲月

その困苦の様みそなわし

民の心を安んずるため

神の遣わし給うたもの

それ故に命の主しゅ

榮はえある神はこの御子に

世俗の榮え授け給うた

シュルドの嫡子(4)ペーオウ

その名シエデランド(5)の地に聞こえ

令名あまねく知れわたる

若宮たるもの父君の

庇護のもとにて惜しみなく

財宝を分かち与える徳行を

なさねばならぬ

齢重よわいねた後のちの日に

戦乱の時いたりても

人心変わらず 忠節の心失わぬよう

いかなる部族にあらうとも 人はみな

賞賛浴びる行為の故に令名を得る

時たつて武勇すぐれたシュルド王

天命つき主のもとに身罷る

この君主 シュルド家の君王が

語る力の消えゆく前に

命じたごとく寵臣ら

海原うしちの潮のもとへ亡骸なきがらを運びゆく

長きにわたる治世であつた

二一〇

泊まりに舫ちやう一艘の船

輪になつた船首をいたたく

氷の覆う貴人の御船みふね

王の御船が今船出する

民の敬愛うけた王

財宝分かち与えた人

輝ける人の亡骸

それを御船の懐におく 帆柱近くに

あまたの財宝・飾りの品が

遠き方より持ち運ばれた

かくも見事に飾られた船

武具・具足・刀剣・鎖鎧くさりよろい(6)でこのように

飾つた船を知る者はない

王の御船みふねにあまたの財宝

この宝物 王に伴い いずれ遠くに

波のまにまに流れ去る

国の宝を家臣たち王に供えた

王いまだ幼き日

いとけなき身をただ一人

波路を越えて流し送つた人びとが

捧げたものに劣ることない財宝を

さらに家臣らきんし金糸の御旗みはたを

亡き王の頭上に高くはためかせ

三三五

四〇〇

四五

三三〇

亡骸を潮にまかせ大海原の波にゆだねた

人びとの心哀惜に満ち悲嘆に暮れる

評定の場に座す人びと

天下の武人たち

誰一人しかと言える者はなし

この積荷何人の手に渡るのか

五〇

さらには心様よきハールガ

聞くところウルスラは

戦を好むシュルヴィング族の王オネラ

その寝殿のいとしき添い人 后となった

さて フロースガール王

戦陣に名をはせて

名将として世に聞こえ

家臣たちよく随順し忠君の誠を尽くす

若き武士その数を増し

若武者の軍強大となる

王の心に浮かぶのは館の建造

蜜酒の酒杯をかわす広大な

人の子のまだ聞き及ぶことのない

宴の席の建立を布令すること

館内にて老いた者にも若き者にも

共有の地と人の命を別にして

神に授かるすべてのものを

分け与えるのが王の願い

さて聞くところ

王はあまねく國中の

多き部族に労役の命を与える

殿堂の絢爛たる仕上げを命ずる

六五

第一節

時がたち城市のうちで

シュルディング家のベーオウ

民草の慕う君王

名君と聞こえ歳月をへる

父先王は彼岸へたつて今は亡い

やがて後の日気高き王子

へアルフデネの生誕をみる

へアルフデネ

年老いてなお勇猛果敢

生ある間

輝けるシュルディング族を統治する

諸軍を率いるこの王に

四人の御子相次いで生まれ出る

へオロガール フロースガール

六〇

七五

五五

七〇

速やかに時いたり
くじたま

威令四方におよぶ王

「牡鹿館」^{おじかやかた(り)}と屋敷を名づく

王は約束違えることなく

宴の席^{うたげ}で宝物を 財宝を

分かち与えた

その館高く聳え

幅広の切妻いだき

憎悪の焰 憎しみの猛炎をまつ

時たつて後^{のち}

義父と義子との宿怨が積もりに積もり

戦いの火蓋が落ちることになる

だがそれは、まだまだ先のこと

時 折しも

暗闇に住まいする不敵の悪鬼

日々殿中の歓楽の声を耳にして

悶々と憂愁のときを過ごす

館より豎琴の音響^ねき

詩人の吟詠^{うたひ}の声耳をうつ

遠き昔の人の起源を

語るすべ知る詩人^{うたひと}はいう
し

九五

八〇

日と月を 地に住むものの灯とし 灯火として

勝ち誇る思いをもつて天におき

木々と木の葉で大地の面飾^{おもて}り給うたと

さらにまた動くものすべてのために

命を創り給うたと

戦士たち喜びに満ち

歓楽の日々を過ごした

やがて一つの物の氣 地獄の悪鬼

悪しき行為に取りかかる

この猛き悪霊 名はグレンデル

悪名知られ辺界を渡り行くもの

荒野を治め砦となす

幸せ薄きこの者は

カインの一族として造物主より

呪われて以来久しく

妖怪の住処^{すまか}に住まう

永遠なる主^{とこしえ} アベル殺害の故

カインの罪に 報復を与え給うた

殺害の恨みの所業悦び給わず

遠流^{かんる}の刑に処し給う

九〇

一〇五

一〇〇

その憎しみの行いのゆえ
カインを人の住む世界から
遠く追放し給うた

一一〇

妖怪の末裔はみな

カインより生まれ出る

妖魔に小鬼 死霊も然り

神に刃向かうこと長き

巨人たちまた然り

神は彼らに応分の

報いを与え罰し給うた

第二節

この悪鬼 夜の帳とばりがおりたあと

一一五

そびえたつ館に向かう

富み栄えるデネびと人たち

ビールの宴うたげが果てたのち

館の内うちでいかにあるかと

気高き武人えん宴果えんてて安眠まなかの最中まなかにあった

悲哀えんを知らず人の世の憂あはれいを知らず

一一〇

呪われた被造物

凶悪あつにして獐猛やまのもの

蛮行やま恥はじぬ残忍やまの徒

たちまち身構え

寝所ねどにあった三十人の武士ぶしをかつ攫うう

この殺鬼せつき獲物えつぶつにけん舞ぶ

殺戮せつりくのあと屍引しかばねっ下さげ住処すまかをめ指さす

一一五

やがて明け方 夜の白む頃

グレンデルの狼籍ろうせきの跡 人みなまなの眼まなこを射ぬく

宴うたげのあとに湧わき起おこる悲愁ひしゅうの叫こゑび

朝あさまだき慟哭たうこくの声こゑ四辺しへんを包つつむ

名高き君主 世よに類たぐいなき貴人きじん

悲しみのうちに座ます

あの憎にくき者 呪のろわしき悪鬼あくおにの仕業しごふ

その痕跡あとを人ひとびとが認まめたとき

王わうは雄雄ゆうゆうしく

喪臣さうしんの悲哀えんを胸むねに秘ひめ耐たえる

悪鬼あくおにとの闘たたかいの厳酷げんこくさ忍しのびがたく

忌いまわしく長ながきにわたる

あの殺鬼せつき 時ときを移うつさず

一夜いちやの後に再度またの殺戮せつりく

重なる非道ひどう暴虐ぼうよくをなし

いささかも心の疼いたき知しることはない

執着しやくしやくの様ようただごとごとならず

広間ひろまに巣すくう悪鬼あくおにの憎悪にく

一一五

一一〇

明白な証あかしによつて知れわたり

あかるみに出るその時に

さらに遠くに安息の場を移しかえ

離れの部屋に寝所を求める者を見るのは

易いこと

悪鬼の毒牙を逃れた者は

その後ますます遠くに離れ

ますます固く身を守る

かくして悪鬼専横の限りをつくし

正義に抗あらがい

单身 武士ものふみなを相手取る

華美をきわめたこの館

やがて人影絶えてなし

月日たち時は過ぎ行く

シュルディング族の王

十二歳とほ悲哀に耐えた

苦しみの一つひとつに

大いなる悲しみの一つひとつに

それゆえに事の次第は悲しく歌われ

人びとの またその子らの耳に入る

グレンデル フロースガールと長く抗あらがい

敵対をなし

一四〇

いく歳とし月の非道暴虐

絶えざる戦い挑んだ様が歌われた

この悪鬼デネの武人のいづれとも

和睦望まず

蛮行を打ち切る気持さらにない

人の命の代償⑩の金

支払う心 露ほどもなく

殺鬼の手より気前よく

賠償金を得る期待

寄せるは詮ないこととの思案

疑念を抱く賢人はなし

この幽鬼 暗き死の影

徘徊し時に待ち伏せ

百戦錬磨の武人たち また若武者に

迫害の手をおよぼせる

久遠くおんの闇のうちにあり

霧たちこめる荒れ野を支配

この黄泉よみの世界に通じたる者

踵かかとを返し

いづれの方に消え失せるのか

知る者はない

独り荒野を跋扈する

人みなに恨みもつこの恐ろしき敵

一五〇

一四五

一五五

一六〇

この通り罪業の数数をなし

非道の危害たび重ねる

この妖鬼 漆黒の夜

華美をきわめた牡鹿館に住まいする

だがこの妖魔

貴き御座 王の玉座に近づけず

それは主の 御心の故

主の愛を知らぬ故

シュルディング族の王にとり

この出来事は一大災禍 心痛の種

猛き者たち幾度となく多数座し

策をめぐらす

この恐ろしき襲撃に

かれら武人は何を為すのが最良か

英雄しき者たち

思案に思案を積み重ねる

時には彼ら

邪教の神の堂にぬかづき

生け贄まつる祭祀を誓い祈念する

この大難の時に当たって

魂食らう邪神の加護を

求めることば唱え念ずる

これこそが彼らの習い

一六五

異教徒の希望のともし火

彼らの心 冥府を思い

主を知らず

もろもろの行い裁き給う神

主なる神

彼らこの神を知らず

天の護り手 栄光を司る神

この神を称えることを知らず

恐ろしき苦難に遭うとき魂を

燃えさかる火焰の中に突き落とし

安心を想うことせず

改宗の意志なき者は

苦悶に沈む

終の日ののち主をもとめ

父なる神の御胸にて加護受けること欲する者は

幸を授かる

一八〇

一七〇

一八五

一七五

第三節

ヘアルフデネ公の御子

この有様に 国難 片時も脳裡を去らず

心の休まることはない

知将とてこの内憂の根を絶つあたわず

一九〇

争いは熾烈の余り耐えがたく

憎悪に満ちて終わりを知らず

この被害 身の毛もよだつ闇夜の災厄

残虐非道の暴悪

民草の身に降りかかる

ヒイエラーク王の一人の武人

イエーアト⁽¹⁾の国中で

武勇並ぶものない勇者

故郷において事の次第を

グレンデルのこの暴虐を聞き及ぶ

今日この世で かなう者ないこの武人

高貴にして勇猛の人

よき船の調達を命じた

白鳥渡る海原を越え

令名はせる軍人⁽¹⁾ ひとりの王をたずね行くそのために

今この時に 加勢する手を王が欲するゆえにである

この武人 国民の敬愛の的なれど

知恵ある人びとこの人の船出を止めず

この勇猛果敢な人を励まし

吉凶を占いもした

勇者はこの時イエーアトの精鋭を

二人とは見つからぬ剛の者どもを

選り出して部下としていた

航海を知ることの知将 十四人の部下を引き連れ

船に赴き渚を示す

時はきた 船は崖の下 波に漂う

戦士たち 舳先に出でてしっかと立ち

潮は渦巻き 海は岸辺の真砂に砕けた

戦士たち輝ける武器甲冑を

見事に飾った鎧兜を

船の懐⁽¹⁾深くに運ぶ

勇者たち 堅牢に仕上げた船を押し出だし

望みの征途に船出した

船首に泡立つ勇者の船は

風をはらんで波立つ海を

飛ぶ鳥さながら進み行く

弓なりの舳⁽¹⁾いたたくこの船は

しかるべき時を経たのち次の日に

早くも故郷を遠く離れた

船人たちは陸地を望む

海辺の崖が陽光に映え

峻嶮の山そびえ立ち

幅広の岬が見える

ここに至って海路は尽きる

二〇〇

一九五

二〇五

二二〇

二二五

二二〇

船は目指す地に着いた

時を移さずウエデル(12)の人びと

戦いくまのいでたち 鎖鎧 鳴り響かせて

陸地に降り立ち船を舫い

船路ふなじの安穩を神に謝す

二二五

それがし久しく海岸の見張りを勤める

盾もつ武人がこれほどまでに堂堂と

この地を踏んだためしなし

一族の同意のしるし わが軍人いくまびとの合言葉(13)

御身おんみらのご存知ないのは明明白白

しかし、それがし 御身らの中のさる方

甲冑を纏われたあの御方ほど

優れた武人をいまだ見かけず

武器で飾った従者にあらず

あの容貌 並外れた姿態に偽りはない

おのおの方が隠密として

このデネの国土を歩み行く前

今それがしは貴殿の家系を知らねばならぬ

さあ 異国の船人ふなびとたちよ

わが平明な考えを聞き給え

いずれの地から来られたか

早速に明かされるのが最上と心得申す」

二二五〇

二二三〇

海岸の崖を受け持つシユルディングの哨兵その時

一団の者 きらめく盾に装具整え

船から渡した踏み板をわたり来るのを

城壘から見た

あの者たちは何者なるかと

訝る思いに矢も盾もたまらず

フロースガール王のこの従者

岸辺めざして馬を駆る

両の手に大槍を取り力をこめて振りかざし

格式ある言葉をもって問いただす

「鎖鎧くさりよろいを纏う方々

このように海路うなじを渡り海原を越え

この地まで高き船高せんこうの船乗りこなし

たどり着かれたおのおの方

貴殿たちは一体いかなる武人であるのか

憎むべきものどもが水軍率いてデネ人びとの地に

襲撃をしかけることのないように

二二四〇

第四節

指揮とる領袖 語彙の蔵を開いて答えた

「われら 種族はイエーアトの民

ヒイエラーク王の臣下たる者

二二六〇

二二五五

わが父はあまた部族に知れわたる

高貴な武將

その名はエツヂセーオウという

長寿の末に天に召された

評定に加わるものたち

国中で誰一人としてわが父を

記憶せぬ者はない

われら一同 友好の心を抱き

貴殿の君主 国民の保護者

へアルフデネ公の御子

その方をたずね来った者である

ご案内 よろしくお願い申し上げます

われら 令名聞こえたデネの君主に

重要な使命帯び 参った者たち

それがしの思うところ

何事も隠し事があってはならぬ

われらの聞き及んだこと真実であれば

シュルディング王朝の民草の間にあつて

狼藉を働く不可思議なもの

正体不明の迫害者

民草を震え上がらせ

漆黒の夜いわれなき憎悪をあらわし

屈辱を与え殺戮をなす

二六五

貴殿はすでにご存知のこと

この災禍に関し率直に

フロースガール王に策謀を

賢明にして優れた王が

敵を征する方策を

それがし言上奉る

この惨禍のもたらす王の苦悩が

変わることもあるものならば

安らぎが今ひとたび王の御胸に帰り来て

湧き出する悲哀はやがて消えてゆく

さもなくば 館の中のこの館

高みに聳え立つ限り

打ち続く辛苦の時を 艱難を

王は耐えることになる」

恐れを知らぬこの武人

見張りの者は馬上で告げる

「頭脳鋭敏にしてよく熟慮する 盾もつ武將は

ことばと行為 異なることを知らねばならぬ

それがし ただ今聞くとところ

ここに居わす一隊は

シュルディングの君主に忠義の

御方とお見受け申した

二七〇

二八五

二八〇

二七五

二九〇

いざ参られよ 武具と甲冑そのままに

それがし ご案内の役うけたまわる

おのおの方のご乗船

タールの跡も新しい浜辺の木船

弓なりの船首いたたくこの船が

この大切な御方を

海原の潮を越えて

ウエデルの岸辺に送り届けるその日まで

配下の若き武士に丁重な警護を命じ

敵の手から守らせましょう

立派な行いなす人は

降りかかる戦火をくぐり

無事生きて帰還するのが誰も運命

三〇〇

さて一行は陸路を進む

船は静かに待機する

船幅広きこの船は

太綱で繋がれて

しっかりと錨をおろした

兜の上にきらめくものは

金で飾られ光り輝く

火で焼き入れた猪の像 生命の守り

戦いを待つ心は逸り 歩み速まる

三〇五

武人たち 一団となり進みゆき

金飾ほどこす壮麗な

木造の館を目にする

これこそは 大空のもとに建つ館の中の館

大地に住まう者たちとその名あまねく聞こえたもの

権勢もつ人の住まうところ

その光輝諸国におよぶ

武勇優れた見張りの武人

一行が迷わず進みゆけるよう

誇り高き人びとの住む

輝ける館をこの時指し示す

馬を反して哨兵はいう

「それがしの行くときが来た

全能の父なる神が恩寵をもち

大義の戦に望まれたとき

貴殿たちを加護されんことを

それがし海辺にとって返し

略奪の意思もつものを見張って参る」

三一五

第五節

行く道は石を舗き一行をおのずと導く

鎖鎧は光に輝き

三二〇

手でつなぎ合わせたきらめく硬き鉄の輪は
鎧(14)の上に音たてる

厳(15)しき甲冑姿で

まず館まで進み来たとき

船旅に疲れた人びと

幅広の盾 強堅な盾を

館の壁にたてかけ床几(16)に座した

船人(17)たちの鎧 鎖の衣が鳴り響く

船人の武器 槍は一つ処(18)に立ち並び

灰色の先端をもつトネリコ材の森となる

鉄輪衣(19)のこの一隊 武装に抜かるところはない

その時 誇り高き一人の武将

戦士たちの素性を問う

「おのおの方 金張りの盾

灰色の鎖の衣 その兜(16)

重ね並べた数数の槍

いずれの方より携えられたか

それがしはフロスガール王の重臣

王の使者をつとめる者

これほど雄雄しき外国(20)人が隊を組むのを

それがしいまだ見たためしなし

フロスガール王をたずね来られたその理由

傲慢のゆえの追放にはあらず

気高きお心のゆえと見受けた」

ウエデル人(21)を率いる武将

誇り高く恐れを知らぬこの武人

兜のかけに威厳を見せるその人が答えていう

「われらはヒイエラク王と食卓をとにもするもの

ペーオウルフこそわが名

令名高き王 貴殿の君主

へアルフデネ公の御子(22)に

御心(23)の広きをもつて

お目通りかなうなら

われらが来訪の趣お伝え申す」

デネの武人に誰何(24)した人

ウエンデル族(25)の首領

心意気と剛勇と知略をもつて名をはせたウルフガールはいう

「デネ(26)人の友 シュルディング族(27)の長

指輪を分かち与える人

令名知られたその王に

それがし貴殿の請われるがまま

ご用の趣 おのおの方の遠征のこと

尋ねてまいる

その上で高貴の方がそれがしに

三三五

三三〇

三二五

三四〇

三四五

三五〇

三五五

托たくさんとする御心みこころのうち

即刻お返事仕る」

ウルフガールは速やかに

齡よわい重ねて白髪となるフロースガールが

戦士らと共に座す場へ赴いた

剛勇の武人は進み

デネの君主の両肩の前に立つ

この武人礼を失することはない⁽¹⁹⁾

ウルフガールは親しき君主に言上する

「今ここに遠くの方かたより

海原の広きを越えて

イエーアトの人びと参上

戦士たちの首領 名はベーオウルフ

この御仁 わが君とことば交わすを

許されたいと請い願う

慈悲ぶかきフロースガール王よ

言葉かけるを断りめさるな

武具から見るに敬意にふさわしき武人たち

戦いくさを好むこれら戦士を

ここまで率いた

首領はまさに剛の者」

第六節

シュルディング人びとの守り主

フロースガール王は宣のたまう

「余は幼き日のその人を知る

亡き父君は 名はエツヂセーオウ

イエーアトの王フレールゼルが

一人娘を嫁がせた人

今ここに屈強な子息

信をおく友に会うべくたずね来られた

かのイエーアトの地に

わが友好のしるしなる贈り物

届け参まゐった船人ふねびとのいう

武勇名高きこの人は

三十人力の握力もつと

余の信ずるところ

聖なる神がこの人を

グレンデルの非道に對抗させんとして

われらが処 デネ人びとの国へ

恩寵により遣わし給うた

余はこの剛勇の士に

その勇氣に酬はらむる宝物ほうもつを

授け与えねばならぬ

三六〇

三六五

三七〇

三七五

三八〇

三八五

急ぎ参つて余の命を伝えるがよい

中に入られ 一堂に会する余の一族の

面々に会われよと

またかくも伝えよ

客人たちをデネ人は

歓び迎えることであろうと

ウルフガールは館の戸口に進み行き

館のうちより布告する

「戦果赫赫たるわが君主

デネ人の首領は命じた

おのおの方に伝えるべしと

わが君は貴殿たちの血筋を知る

海原の怒涛を越えて漕ぎ渡った

勇氣ある貴殿たち

この館においてわが君の

歓び迎えるところ

さあ 兜をいただく戦の出で立ちそのままに

フロースガール王に目通りめされよ

盾と槍 敵の生命を奪うその槍

それらの武具は会谈の終わるを待って

そこにそのまま

強き武人は立ち上がり

三九〇

多くの戦士 重臣たちの見事な一隊

首領の周りを取り囲む

数名のもの 勇者の命ずるがまま

武具の見張りに待機した

一行は一人の戦士に導かれ

牡鹿館を足早に

一団となり進み行く

戦陣の夜叉

兜の影に威厳を見せて歩み来て

暖炉おく広間に立った

この武人ペーオウルフは

鉄鍛冶の技 鉄輪をつなぐ網の鎧

鎖 鎧を輝かせ口開く

「フロースガール王よ

ご健勝におわさんことを

それがしヒエラクの一族にして若き重臣

若くして数数の武勲を立てた

グレンデルの業 わが祖国において

隠れなき事実となり

それがしの知るところとなる

船人の語るところ

この館 他に比べるものない館

夕べの光が天空の

四〇〇

四〇五

四一〇

輝きの下に沈んで隠れたあとは

戦士たちのすべてのものに

空ろにして無益なものとなって立つ

さてそこで 陛下に言上仕る

わが人びと この上なく優れた賢者は

それがしの強き力を知るゆえに

それがしに勧めて語った

フロースガール王をおたずねせよと

かつてそれがし敵の血を浴び

戦いより帰還したとき

この人びとそれがしの

働きを眼の当たりにした

その戦いでそれがしが

五人の敵を縛り上げ

巨人の一族打ち破り

海に住む怪物どもを

夜中波の上にて切り殺す

それがし辛苦に耐え

敵対なすもの打ち負かし

ウエデル人の苦しみに報復をなす

刃向かうものに降りかかる苦難

みな自らが招いたもの

そこでこの度グレンデル

四一五

かの怪物 あの巨人に

単身相目見えるのが道理と存ずる

そこでお願ひ申し上げたきこと一つ

光輝に満ちたデネ人の首領

シュルディングの民の守り主

戦士たちを庇護する御方

あまた種族の高貴なる友

この度それがし

遠路はるばる参りし上は

単身わが戦士の隊

この勇氣ある一隊引き連れ

牡鹿館の穢れ除くをお許しありたい

あの怪物その無鉄砲のゆえ

武器を好まぬと聞き及ぶ

それ故それがし

わが君主ヒイェラク王の御意にそうべく

戦いの場に剣を携え あるは又

幅広の盾 シナノキ材の

黄色の盾を持ち行くことを好しとせず

それがし素手で仇と争い

不倶戴天の仇と仇

死闘を尽くすこととなるべし

死が連れ行くもの

四二五

四二〇

四三五

四四〇

主の裁きに身をゆだねねばならぬ

あの怪物勝利するなら

戦場となる館において

幾度も人肉むさぼり食らうたごとく

恐れ気もなくイエーアト人を

誉れある武人たちをむさぼり食らうと

それがし思念仕る

死がそれがしの身掬えても

頭を土にておおうわが屍の埋葬

そのために御手煩わすことはなし

独り行く かの怪物

わが身を滴る血に染めて

朱に染まった屍の味を楽しむつもり

無残に食らい荒れ野の住処

その隠れ家を血でよごす

それがし戦に斃れるときは

遺体についてはご放念あれ

わが胸を守ったこの比類なき戦の衣

鎧の中の選りすぐり物

亡きフレージェル王の御形見にして

ウェーランドの作 この鎖鎧を

ヒエラーク王のもとお届けくだされ

運命はいかなる時も

定めのままに動くもの」

第七節

シウルディングの民を導く

フロースガール王は宣う

「わが友ペーオウルフよ

過ぎし日のわれらが交わりの故

また 友好の心から

われらをたずね参られた

そなたの父君在りし日のこと

父君はウエルヴィング族の一人の者

ヘアゾラーフをその手で殺害

この争いが大いなる宿怨を生む

ウエデル人戦を恐れ

父君をとどめおくことができず

父君は波浪のうねりを乗り越えて

榮譽あるシウルディングの民

デネ人をたずね来られた

余 折しもデネ人の国

治め始めたばかり

広大なる国土 英雄たちの集う宝庫を

若くして掌中にする

四五〇

四四五

四六〇

四六五

四五五

へアルフデネ王の息

余の長兄へレガール

すでに没してその時は亡い

余に勝る王であったのに

宿怨の清算

財宝により余がなした

海原の波頭を越え

ウエルヴィングの一族に

時旧りた宝物送り届けた

父君は誓詞を述べる

グレンデル憎しみの思いに駆られ

この牡鹿館でいかなる屈辱

敵意に満ちた攻撃の

いかなるものを余に加えたか

余人に語れば心中悲嘆にかき曇る

館の軍勢 余の軍団

その戦士の数減ずるばかり

運命は戦士ら攫い連れ去って

グレンデルの恐ろしき手に引き渡す

神に思し召しあるならば

この残忍な殺戮者その罪業を

押し止めるのは易きはず

豪の者どもビールに酔い

四七〇

ビールのジョッキを傾けながらしばしば誓う

この宴の広間で人の恐れる刃もち

グレンデルの襲撃待たんと

朝となり日の輝くとき

この蜜酒の宴の広間 見事な広間は

血のり飛び散り

床凡おく壁の羽目板

ことごとく血潮に濡れ

広間は刃の血しぶき浴びる

忠義なるもの 親しき従者たち

死が連れ行く故に

余の手に残る者ますます少ない

だが今は宴の席に留まって

そこもとの心のうちを

勝ち軍の栄光を

思いのままに語られよ」

さてそこで酒宴の広間

床凡の上 片付き

イエーアトの武人ら一行 もてなしを受く

勇気ある者 力を誇るその者たち

歩を運んで床凡に座し

一人の僕

四八〇

四八五

四七五

四九〇

四九五

飾り施すエールの酒瓶片手に運び

澄みきった美酒を注いで務めを果たす

吟遊詩人が折折に

牡鹿館に澄んだ歌声響かせて

デネ人とウエデラ人との大集い

英雄たちの歓びの時は過ぎゆく

第八節

エツチラーフの息 ウンフェルス

シウルディング族の君主の足下に座を取る者

大地の上また天の下何人といえ

己に勝る誉れの行い

成し遂げるのを好まぬゆえに

勇武の船人 ペーオウルフの冒険に

苛立ち激しく

いさかいの火つけんものと口開く

「お手前がああペーオウルフか

果てしなき海でブレカとその泳ぎ競うたという

そこもと二人は自惚れにより海を試し

深き水に命かけ

愚かしき自慢話の種とした

あの御仁か

そこもと二人が海原に泳ぎ出たとき

何人も 敵も味方も

命知らずの冒険を

止めることかなわす

そこもとら両の腕で

潮の流れ掻きよせて

手を掻き動かし海路をわたり

海原を滑りゆく

冬の荒海 波立ち騒ぐ

そこもとら水の力に七夜の苦闘

ブレカの力貴公に勝る

泳ぎくらべはブレカのもの

ブレカ潮に運ばれ

朝へアゾ・レームの浜辺に漂着

その浜辺から祖国を求め

親しき人を ブロンディングの地を

麗しき要塞を

国民治め砦と財宝

支配する かの要塞を

ペーアン・スターンの息 ブレカ

貴公に吐いた大言壮語

実のものとして見せる

そこでそれがし思念する

五〇〇

五〇五

五一〇

五二五

五二〇

五二五

多数あまたの戦 厳しき死闘で
いずれの地でも

貴公は常に勝利した

ではあるが この辺りにおいて夜を徹し

グレンデルを待つならば

結果は悪しきものとなる」

エッヂセーオウの息 ベーオウルフはいう

「わが友ウンフェルス

酔いにまかせ

ブレカのこと ブレカの冒険

すぎ放題に語ってくれた

だが真実はわが言葉

海での力 辛苦の克服

何人なんびとにも負けはせぬ

まだ若き日のこと若気のあまり

意を同じゅうし互いに誓う

二人して海に泳ぎ出

命をかける冒険せんと

海原に泳ぎ出たとき

手は抜き身の刃やいば

鯨から身を守らんとの思いから

波を乗り越え海原を

五三〇

速やかにゆきそれがしを

抜き去ること

ブレカ到底あたわず

それがし又ブレカに遅れとるつもりなし

われら海原のうえ五夜を共にす

やがてそのうち寄せ来る波が 潮流が

われら二人を引き離す

凍いてつく寒気 暗さましゆく夜の闇 肌刺す北風

行く手さえぎる

波高く海魚かいぎよの心穏やかならず

わが身体からだ被おほい包む固き鎖

手造りのもの

手で編まれ金で飾った戦の衣

胸を被おほつて

敵の手からわが身を守る

われに敵する非道の者 容赦なく

わが身体からだしつかと掴み

水底みなそこにまで引いてゆく

だが天佑われにあり

われ切きつ先で 刃やいばでもって

怪獣を刺さし

強力こうりきの海の獣けものはわが手にかかり

闘いの嵐の中にたおれて果てる」

五四〇

五五〇

五五五

第九節

「われに憎しみ抱くものたち

再三再四激しく攻めたて

われ相応の返礼に

名刀浴びせるひと振りふた振り

非道なすこの輩たち

海の底にて饗宴の場を取り囲み

わが肉の相伴を待つ

だが馳走の喜び得ることはない

夜のあける頃波打ち際に

刃に傷つき刀によって

永遠の眠りに出で立った軀をさらす

その後は船人たちの

水深ふかき海路行く

航路の邪魔だてするものはない

東から赤赤ともえる神の松明

ひとつの光が立ちのぼり

海は静まり風吹きさらす岸壁の影

岬の影が眼に入る

人その勇氣失わぬとき

運命は往往にして

いまだ命の定まらぬ者を助ける

五六〇

ともかくそれがし刀でもって

九頭の海の怪獣退治した

この天空のもとこれに勝る夜中の激闘

潮の中でかくも苛酷な惨苦にあつた者のこと

まだ耳にした覚えなし

ともあれそれがしわが冒険に

疲労困憊の中

敵の手逃れ生き延びる

その後海は潮の高まり

山なす波がそれがしを

フィン(27)の陸地へ運び来た

それがしいまだ貴殿について

これほどの闘争のこと

剣の武勇(28)を聞きおよんだ覚えなし

だがさほど自慢することでもない

ブレカはいまだ 貴殿もまた

戦競(29)で刃きらめく刀もち

これほどの武勇示した験(30)しなし

もつとも貴殿 近親の者

おのが兄弟 殺しはした

貴殿の知力並のものではなけれども

兄弟殺しの罪により

地獄で罰を受けねばならぬ

五六五

五八〇

五七〇

五八五

エッヂラーフの息子よ

それがし貴殿に真実を語る

貴殿のことばの伝えるごとく

貴殿の心 心情が⁽²⁹⁾

武勇を尊ぶものならば

あの恐ろしき怪物グレンデル

牡鹿館^{おじかむかた}で貴殿の主君に敵対し

多くの暴虐働いて

さしも多大の屈辱を

与えることはなかつたらうに

だがあの悪鬼 貴殿の同胞^{はらから}

勝ち戦の民シユルディング人^{びと}

その人びとの宿怨を

恐ろしき刃^{やいば}の嵐を

恐れる必要なしと見た

斃^なした者たち攫いゆき

デネ人の誰であろうと容赦せず

人肉食らう快樂^{けうらく}にふけり

眠りにつかせ⁽³⁰⁾ あゝ世に送る

槍のデネ人からの応戦

悪鬼おのが念頭になし

それがしやがてイエーアト人^{びと}の

強さと勇気 戦で示す

五九〇

日が改まり朝の光が

人の子の頭上に昇り

太陽が光のころも身に纏い

南の空にその輝きを放つとき

蜜酒^{みつさけ}の座に着くことのかなう者

高ぶる心抱きつつ

今ひと度蜜酒のもと歩みゆく」

六〇五

白きもの御髪^{みくし}にまざり

武勇の誉れ知れわたり

財宝分ち与えた王

輝く民^{なみ}デネ人の王^{びと}

その時喜び 助力に頼る

ペーオウルフの固き決意

国民^{くこたみ}守る御方^{おんかた}の耳に達して

六一〇

戦士たち笑い声たて

宴^{うたげ}のさんざめき高まり

樂しげなことば飛び交う

フロースガールの王妃

ウエアルフセーオウ

儀礼わきま進み出る

黄金^{こがね}で飾った衣装つけ

六〇〇

広間の人に言葉をかける

この高貴な婦人

デネ人の国まもる王に

まず酒盃をささげ

このビールの宴で

親しき人びと飲ばせ給えと請う

戦の誉れ高き王 酒宴を楽しみ

宴の盃を干す

ヘルミング家の出になる后

酒席を巡り 練達の臣

若き家臣に 一人残らず

宝玉飾った盃とらせ

やがて順番めぐり来て

宝環で身を装った心けだかきこの王妃

ベーオウルフに蜜酒の酒杯もちゆく

イエーアトの王子とことばを交わし

語る端ばし知性見せ

あの暴虐を防ぐため

何人か武人の助け得たいとの

願いが現実となることを神に謝す

闘いの猛者 この王子

ウエアルフセーオウの盃受け

戦に思い傾けながら口開く

六一五

エッチセーオウの御子 ベーオウルフはいう

「わが手の者たち従えて

海原に出で船中に座した時

それがし決意を固くした

貴国の民の願いかならず

叶えて進ぜる

さもなくば敵の手にしつかと掴まれ

惨殺の憂き目にあつて斃れんと

われかならずや英雄の

勇気ある働きなすべし

しからざるときこの蜜酒の広間において

わが最期の日の到来を見る」

この言葉 イェーアト人の誇れることば

この婦人いたく悦び

国民の敬慕集めるこの王妃

黄金の衣装身に纏い

わが君のもとに歩んで傍らに座す

再び広間は往時のごとく

人びと歓喜に包まれて

英雄しきことば語り合い

勝利の民の宴賑わう

やがてへアルフデネの御子

六三五

六二五

六四〇

六三〇

六四五

夜の憩いを望まれる

王 知り給う

太陽の光が見えたその時以来

すべてを闇につつま夜

雲におおわれ漆黒となる闇の姿が

物すべての上に

忍び寄る迄かの妖鬼

攻撃の企みねっていることを

その場の人びとみな立ち上がる

フロースガールとペーオウルフ

互いにことばを交し合い

フロースガールは

ペーオウルフの武運を祈り

酒盛りの館の護りを托して語る

「手をあげて盾を掲げる強力を

余が得て以来ひと度も

そなたに今預けるのを別にして

デネ人のこの岩館を何人といえ

未だその手に托したことなし

他に比類なきこの館

今その手に収め護り給え

名の誉れ忘れるでない

六五〇

敵の見張り怠らず

剛勇のほど見せられよ

この勇猛なる義拳をなし

そなたが命ながらえるなら

望みのものは好きにとらせる」

六六〇

〔注〕

(1) デネの民 デーン人 (The Danes) 「後の九・十世紀になって英国に侵略を繰り返すスカンジナビア人」のこと。

(2) 蜜酒 蜂蜜と大麦で作った酒。蜜酒の場を奪うに征服する。

(3) エルリ族 デンマークの島々に住み、三世紀中葉から五世紀中葉にかけて、その残忍さと凶暴さで恐れられた部族。

(4) 写本にはペーオウルフとなっているが、史実にもとづいてペーオウの誤りであるとするのが、多くの研究者の見解であるという。—Tuso (1975, p. 1, fn. 3).

(5) シェデランド 今日のスウェーデン南部。

(6) 鎖鎧 別の行の忍足訳による。鉄の輪を繋いだもの。鎖鎧が登場するまでは布か皮で鎧を作っていた。布または皮の上に着用したものと思われる。

(7) Michael Alexander の現代語訳による。

(8) シェルヴィング族 今日のスウェーデンにいた部族。

(9) 牡鹿館 牡鹿は王権の象徴。

(10) 人命の代償金 ゲルマン民族の風習。

(11) イエーアト 今日のスウェーデン南部にいた部族の名。

(12) ウエデル イエーアトの別名。

(13) Hall (1960) による。

(14) 注(6)参照。

六五五

- (15) 和平時にはこのように武器を館の外に置くのが当時のゲルマン民族の習慣であった。Wrenn (1953, p. 129) 参照。
- (16) 現代英語訳および日本語訳の多くが「面頬 (visor) のついた兜」としているが、Britannica CD™⁹⁷にある東部および北部ヨーロッパで用いられた古代の military helmet に関する記述からすると、当時、面頬や眉庇がついていたとは考えにくく。
- (17) この行は原文にはない。
- (18) Klaeber (1950⁵, GLOSSARY 'Proper Names') は次の三つの可能性を示す。(i)ヴァンダム族 (Vandals) [西暦紀元四、五世紀にゴール、スバイン、北アフリカを征服し、四五五年にローマを略奪したゲルマン民族の一部族]、(ii)スウェーデンのウプランド地方にあった Vendel の部族、(iii)北ユトランドにあった Vendil [今日のヴェンスユサル (Vendsyssel) に住んだ部族]。
- (19) 原文は「貴人の習慣をよく知っている」となっている。
- (20) ウェーランド ゲルマン民族の伝説に残る鍛冶の名人。
- (21) Chambers (1952, p. 26, n.) の読みをとる。
- (22) ウェルヴィング族 ゲルマン民族の一部族。
- (23) エール ビールの一種。ただし、文脈からは、ビールとエールを完全な同義語として用いていたようにも思われる。
- (24) ブレカ ブロンディングという部族 [詳細は不明] の首領。
- (25) ヘアズ・レーム ノルウェー南部にいた部族。
- (26) ブロンディング 注(24)を参照。
- (27) フィン ラップランド人のこととする説が有力。
- (28) 剣の武勇 原文は「剣の恐怖」。「剣によって相手を怖がらせる」の意とする。
- (29) 原詩では、頭韻の都合で「心」を意味する語が二度出る。
- (30) 眠り||死。

参考文献

- Alexander, Michael (trans.). 1973. *Beowulf: A Verse Translation*. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books.
- Bessinger, Jr, J. B. (read by). 1962, 1996². *Beowulf*. Caedmon Audio. 1 Cassette. CPN 1161. New York: HarperCollins Publishers, Inc.
- Britannica. 1997. *Britannica CD Version 97*. CD-Rom. Encyclopaedia Britannica, Inc.
- Chambers, R. W. 1952. *Beowulf with The Finnsburg Fragment*. Edited by A. J. Wyatt. New edition revised with introduction and notes by R. W. Chambers. Cambridge: at the University Press.
- Chickering, Jr., Howell D. (trans.). 1977. *Beowulf: A Dual-Language Edition*. Anchor Books. New York; London; Toronto; Sydney; Auckland: Doubleday.
- Crossley-Holland, Kevin (ed. & trans.). 1982. *The Anglo-Saxon World*. Woodbridge: The Boydell Press.
- Hall, J. R. Clark (ed.). 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. With a supplement by Herbert D. Meritt. Toronto: University of Toronto Press in association with the Medieval Academy of America.
- Hasegawa, Hiroshi (長谷川 寛) (trans. & annotator). 1990. 『ベーオウルフ』怪物破壊魔退治の巻 (1). 東京: 成美堂.
- Hazome, Takeichi (羽染竹一) (ed. & trans.). 1985. 『古英詩大観—頭韻詩の手法による—』. 東京: 原書房.
- Kennedy, Charles W. (trans.). 1940. *Beowulf: The Oldest English Epic*. Translated into Alliterative Verse with a Critical Introduction. First issued as an Oxford University Press paperback, 1978. Oxford; London; New York: Oxford University Press.
- Klaeber, FR. (ed.). 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Lexington, MA: D. C. Heath and Co.
- Nagano, Shigeru (長埜 盛) (trans.). 1967. 散文全訳『ベーオウルフ 附 フィンネスブルグ争乱断章』. 東京: 吾妻書房.
- Ôba, Keizô (大場啓蔵) (trans.). 1985. 新口語訳『ベオウルフ』. 改訂版. 東京: 篠崎書林.
- Oshitari, Kinshirô (忍足欣四郎) (trans.). 1990. 中世イギリス英雄叙事詩『ベーオウルフ』. 岩波文庫 赤 275-1. 東京: 岩波書店.
- Sato, Noboru. 1988. *An Interlinear Beowulf*. The Complete Text Edited, with the Interlinear Verbal English Translation and Interlinear Grammatical Note for Each Word, and the Opposite-Page English Translation, and with a Table of the Royal Genealogies Appended. Tokyo: Language Press.
- Suzuki, Shigetake (鈴木重威) (ed.). 1969. *Old English Poetry Beowulf*. 東京: 研究社出版株式会社.
- Sweet, Henry (ed.). 1896. *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*. Impression of 1953. Oxford: At the Clarendon Press.
- Tuso, Joseph F. (ed.). 1975. *Beowulf: The Donaldson Translation, Backgrounds and Sources, Criticism*. A Norton Critical Edition. New York; London: W. W. Norton & Company.
- van Kirk Dobbie, Elliott (ed.). 1953. *Beowulf and Judith*. New York: Columbia University Press.
- Wrenn, C. L. (ed.). 1953. *Beowulf: With the Finnesburg Fragment*. London: George G. Harrap & Co. Ltd.
- Wyatt, Alfred J. (ed.). 1919. *An Anglo-Saxon Reader*. 10th impression, 1962. Cambridge: At the University Press.